

炉辺の枕 (3)

『探偵・竹花 孤独の絆』 藤田宜永

歳を経て読み方、楽しみ方が変わる

美賀多台 つだわたる

推理小説が好きでよく読んでいますが、入り口はコナン・ドイルのシャーロック・ホームズでした。そこからアガサ・クリスティーのエルキュール・ポアロ、ミス・マープルへと名探偵を追っていききました。子ども向けの江戸川乱歩の明智小五郎も読んだと思います。

名探偵が活躍するのが推理小説だと思っていました。

ところが20代になって本邦の推理小説を読み始めると、よく読んだ佐野洋は特定の探偵を出すこと、名探偵シリーズを嫌っていました。松本清張も職業的な探偵は出していません。

横溝正史の金田一耕助は、映画ではたくさん見っていますが、原作は読んでいません。

名探偵のキャラクターに関心が無くなっていました。事件全体の構図、犯罪の社会性や犯人の動機などを楽しんでいました。

ところが30代の後半になって原寮の傑作『そして夜は甦る』を読んでそこに出てくる「沢崎」という探偵に魅了されました。小説自体も面白くてかつ寡作の原寮ですが6冊全部を読みました。ハードボイルドに分類される展開です。

探偵物も面白いなと思い、柴田よしきの『フォー・ディア・ライフ』等の「花咲慎一郎」シリーズも全部読んでしまいました。



そして2018年に出会ったのが『帰来青春』『孤独の絆』他の「探偵・竹花」シリーズでした。2017年に55才のリストラされた男を主人公とする『戦力外通告』を読んで藤田宜永は面白いと気づき、何冊か読んで、還暦探偵の竹花にたどりついたのでした。

最近、このシリーズの1作目『ボディピアスの少女』を読みましたが、あまり面白いと思いませんでした。この時の竹花は40代です。

藤田宜永は40代から60代へと変わっていく竹花を描いていて、歳を経た探偵が私の心を捕らえたのです。

佐野洋の批判は、名探偵シリーズは「マンネリになる」という主旨でした。そういう側面はありますが、短編の小さな事件でも探偵のキャラクターによって深みのある物語になることもあります。

キャラクターの味

このシリーズは短編も長編もありそれぞれ面白いのですが連作短編集『孤独の絆』の『命の電話』を簡単に紹介します。

『命の電話』は、竹花の事務所に正体のわからない、自殺をほのめかす35才の男から電話がかかってきたことから始まります。とりとめのない会話ですが、何日も続きました。

竹花は男を探すことにしました。声にかぶさって聞こえる踏切の音、商店街の防災無線、話題からついに男を突き止め、友達になるという結末です。

もちろんそこに、竹花の依頼された仕事もちょっと絡んでいました。短い話ですがクールで熟練というキャラクターが生かされていました。

長編の『女神』は440頁という大部です。

ある日、竹花の事務所に大阪から大きなバッグが送られてきます。中には歯ブラシなどの日用品、手紙、文庫本、CDなど雑多な「ガラクタ」ですが「預かっておいてください」というメモがありました。

送り主の名前に、竹花は覚えはありません。しかもすぐに「その男は行旅死亡人となった」と知らせに男が現れて、バッグ全部を買い取りたいといました。

そこから謎がどんどん広がります。関係者が殺され、20年前の殺人事件も絡めた展開になりました。登場人物も多く、もしかしたら冗漫な話かもしれませんが、竹花のキャラクターで読ませました。

推理小説の楽しみ方が、若い時から変わってきていることに気づきます。

